

## ● 制作

# まちを架ける

## —代々木上原における、まちと宗教施設の共生—

竹田 彩子

園芸学部 緑地環境学科 環境造園学プログラム (主指導教員: 霜田 亮祐)

TAKEDA Ayako

### 1. 研究の背景と目的

東京都渋谷区に位置する代々木上原は、閑静な住宅地や、個性的なカフェやレストランが立ち並び、落ち着いた街として知られている。代々木上原を利用し調査していく中で、まちの中心を走る鉄道が街を分断していること、そして東京ジャーミイというモスクの在り方に興味を持った。

前者は、代々木上原駅が高架化されていることで、高架下空間が商業施設や駐輪場・駐車場そして物置として閉ざされ、同じ代々木上原を利用するにも関わらず人々の活動は駅を境に分断されていることが分かった。よって高架下空間を開放することで人々の街での活動が広がり、回遊性を高めるという点でオープンスペースとしての可能性があると考えた。

後者は、代々木上原には日本におけるイスラム教の中心であり、国内最大級の東京ジャーミイというモスクがあることが分かった。しかし現地調査をする中でこのモスクは代々木上原の住宅地に突如イスラム建築が現れ、街並みに馴染まず、異質感を抱いた。なぜ異質感を抱いたのか、日本人に身近である神社を例に考えたところ、神社には鳥居や本殿を取り囲んだ境内や参道などがあること、神社で行われる祭りが地域全体で行われていることなどのように、施設を取り囲む屋外空間や施設が持つ機能が街に展開することが地域に馴染んだ景観を作り出していると考えた。これより東京ジャーミイは日本に馴染みのないイスラム建築である上に、その建築様式と地域に馴染む架け橋となる屋外空間がないこと、そして施設が持つ機能が建物だけに収まってしまっていることが異質感を抱く原因であると考えた。また、上記の高架化のまちの分断により、モスクを訪れる人(ムスリム)はモスク側の代々木上原を、代々木上原を訪れるひと(非ムスリム)は商店街側の代々木上原を利用し、同じ代々木上原を利用しているにも関わらず互いを認識することなく生活している。

さらに、昨今のインバウンド需要やインクルーシブな社会の実現が求められている中、まず私たちは多様な文化を受け入れ、それらが共存することが重要であると考えた。このような状況下で、日本有数のモスクがある代々木上原はインクルーシブな街としての可能性を秘めていると感じ、本研究をインクルーシブな社会における都市空間があるべき姿を提示する設計提案と位置づけたい。

以上より本研究は鉄道の高架下空間がもつオープンスペースとしての可能性と、地域環境と宗教施設が共存するためのランドスケープデザインの2点に注目し設計提案を行う。

### 2. 研究の対象

代々木上原を対象とし、高架下空間という都市の隙間を使い、宗教施設と都市空間の共生を図る。

### 3. 研究の方法

高架下にモスクと都市空間が共生できるオープンスペースを作るために、イスラム庭園の特徴、都市に馴染む景観として代々木上原の歴史を調査した。

### 4. 調査と考察

イスラム庭園の特徴として、厳しい気候から身を守り快適な空間(=楽園)を作るために、塀や壁、木に囲まれ日陰が豊富であること、チャハルバグなど幾何学的に水が配置されていることがわかった。

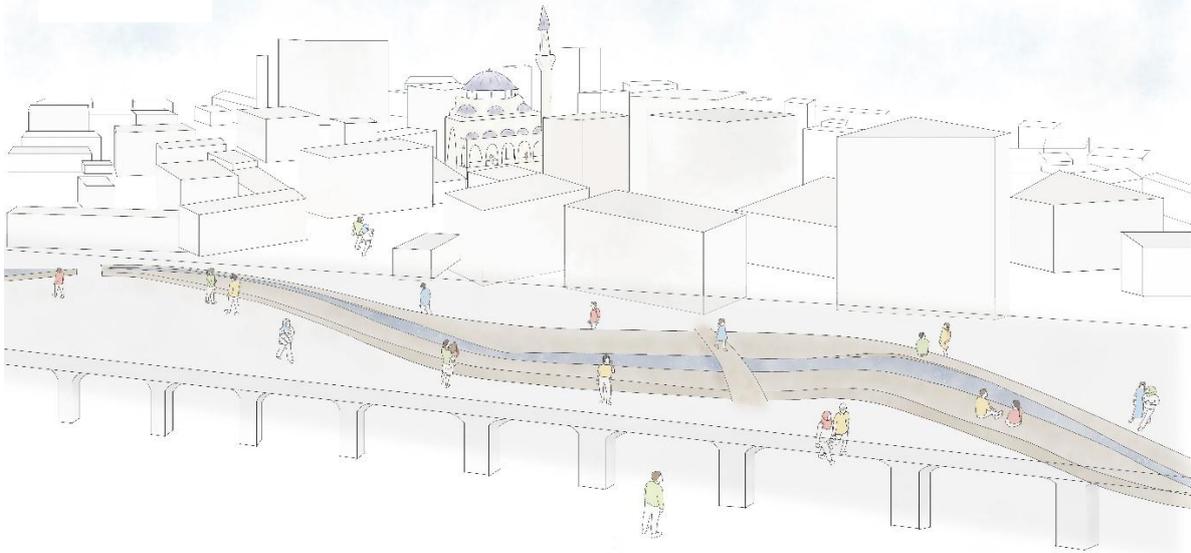
代々木上原は武蔵野台地の淀橋台に位置し、渋谷川最大の支流である宇田川の上流部に当たり、台地の斜面はシイ・カシ類を中心とする樹林が、低地や川のそばには田が広がり、自然豊かな景色が見られた。しかし宇田川によって削られた谷の見通しや宇田川が流れていた跡は戦後の宅地化や暗渠化によって姿は消え、代々木上原の土地の記憶が失われてしまった。

以上より、高架下空間にはイスラム庭園の要素を汲み取りながら、高架下や周辺の公園・空き地にかつての川の流れや自然を活かした緑地空間をつくることで、宗教施設と都市空間の共生だけでなく、今まで失われていたまち-人、人-人の繋がりが生まれ高架下空間がまちを架ける存在になると考えた。

### 参考文献

- 1) 本田創 (2021) 失われた川を歩く東京「暗渠」散歩
- 2) [神谷武夫 イスラーム庭園](#)
- 3) [東長靖 \(2024\) モスクと都市空間の融合](#)
- 4) [日本のイスラームとの関わりの再考](#)

全体パース



平面図



デザインダイアグラム

